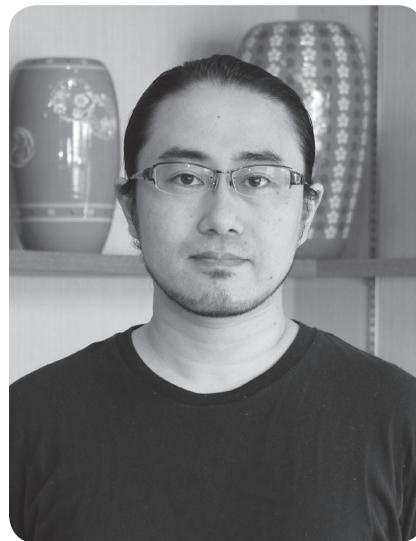


自由に見て使って 楽しんでもらいたい

高田焼宗家

上野 浩平さん (日奈久東町)



高田焼の歴史は400年以上前に遡る。豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に加藤清正公に従い渡來した陶工尊楷が、豊前国・上野釜の口に開窯したのが始まりである。以後、代々伝統を守り続けており、現在13代目まで続いている。その13代目が上野浩平さんだ。

上野さんは日奈久で生まれ育ち、物心が付いたときから親の背中を見ていたことで物作りに興味を持ち始めた。中学生の頃、将来は家業を継ぐ意思から県立第二高校美術科、東京芸術大学美術学部に進学した。卒業後も焼き物に携わるのであれば、大学では違う勉強をしたいとの思いから金属を使った物作りに励む。『金属を別の物に見せる』をテーマに、銅版を使って靴を作った。金属に触ることで土の良さを多角的視点で見る力が養われ、土だったらどうするかを関連づけて考えることで土に興味が湧いた。卒業後、京都市伝統産業技術者研修所（現：京都市産業技術研究所）に入所。一年間焼き物の基礎を勉強した。

「家業を継ぐプレッシャーよりも、まずは役立つようにならなければという思いの方が強かった」と上野さん。帰郷して数年は、思い描いたものを形にする力



▲8月26日～9月1日まで鶴屋百貨店(熊本市中央区)で開催される作陶展に向け準備を進める上野浩平さん

がなく、もどかしさがあった。現在は、今できることに挑戦しており、深く考えすぎて萎縮しないようにしている。先代が築き上げた長い歴史と伝統の延長線上に立っているか、作品を見た人がそう思ってくれるかを考えながら作陶している。

作陶で難しいのは象嵌作業である。象嵌は土が軟らかい時にしか膨らむことができず、乾燥し硬くなってしまうと膨らむことができない。すぐ乾き始めるので、軟らかい土を保ちながら緻密な作業をスピーディーに進めることはとても難しい。また、土の色が陶器の色となるので、土作りを失敗しないように細心の注意を払っている。ろくろや象嵌が上手でも土作りで失敗したら高田焼にはならない。

時代の流れとともに変化にも対応しなければならないが、変えていい部分と守るべき部分があることを心得る必要があるという。先代の作品を見ると常に変化しており、伝統にとらわれない作品もある。自分も挑戦していいのだと後押しされているような気持ちになった。

年に数回、県内外で作陶展を開いている。その目的の一つは、生の声を聞くためである。時には厳しい意見や感想も寄せられるが、真摯に受け止め、次に向けての原動力としている。また、作陶した作品が本来の用途とは異なった使い方をする人もいる。そんな自由な発想から逆にアイデアをもらうこともあるという。

「私の歴史や作品も後世に残っていくので、先代たちの作品に表れているように私も変化に挑戦し、子孫にいい影響を与える。試行錯誤しながら高田焼に自分なりの独自性を確立していきたい」と熱く語った。



2015.SEPTEMBER No.129

- 3 八代市文化祭
- 4 新市誕生10周年記念式典
- 6 全国山頭火フォーラム in 日奈久
- 8 八代市総合防災訓練
- 9 私たちの未来につながる国勢調査
- 10 始まりますマイナンバー制度
- 11 毎日、熟睡していますか
- 12 市職員の給与と人事管理の状況
- 14 くらしの情報
- 16 市民カレンダー
- 18 くらしの情報
- 27 広告
- 28 八代市中学生議会
- 30 まちのわだい
- 31 伝言板
- 32 八代舟出浮き秋のキャンペーン

広報やつしろは、市ホームページ
でもご覧いただけます。

トップページ → 総合案内 → 広報やつしろ